日本赤十字看護学会誌　J. Jpn. Red Cross Soc. Nurs. Sci. Vol.3, No.1, pp.116-125, 2003

実践報告

バングラデシュのICMH（Institute of Child and Mother Health）における母乳育児セルフヘルプグループが母親にもたらす変化
—ICMHで母乳育児セルフヘルプグループ立ち上げに関わって—

久保　伊都子*

Changes in Mothers Affected by A Breast-Feeding Self-Help Group at ICMH (Institute of Child and Mother Health) in Bangladesh
—Observed While Helping to Set Up the Breast-Feeding Self-Help Group at ICMH—

KUBO Itsuko

キーワード：バングラデシュ、母乳育児、セルフヘルプグループ、母親
Key Words：Bangladesh, Breast-Feeding, Self-Help Group, Mother

Ⅰ．はじめに

筆者は1996年にバングラデシュ母乳財団の要請により、2週間現地の医師及び助産師に乳房ケアの一手技である桶谷式手技を広く紹介するという機会に恵まれた。バングラデシュの乳児死亡率は、1999年には人口1000に対して58であり、乳児が人工栄養により下痢を起こし死亡している状況が生じている。バングラデシュで完全母乳が少ない理由として、女性たちの90％が自宅出産であるため、「赤ちゃんに優しい病院」等の指針が国内の隅々にまで行き渡っていないことが挙げられている。国策として母乳育児の推進を図っており、ICMHなどにおいても医療者のための母乳に関する研修が盛んに企画されている。しかしその方法は医師や助産師から母親への母乳カウンセリングという個別的な対応で、母親同士の学習の場や交流の場がないことを知った。そこで母乳育児を体験している母親が、相互交流をしながら母乳育児について学びあえるようなセルフヘルプグループの企画を立案した。本企画は、現地の助産師Fの協力を得て行い、そこに参加した母親にどのような変化をもたらすかを目的に研究を行ったので報告する。

Ⅱ．方法

A．研究デザイン

本研究は女性の文盲率の高いバングラデシュ

*日本赤十字看護大学大学院看護学研究科修士課程
受理：平成15年1月30日

において、母乳育児を推進するために、母親が相互に学習し合うセルフヘルプグループを立ち上げ、その参加者の反応を帰納的に明らかにする質的記述的デザインとした。

1．用語の定義

母乳育児セルフヘルプグループ（Self Help Group、以下SHGと略す）とは、ICMHのLactation Management Center（以下LMCと略す）に通い、母乳育児をめざしている母親の集まりで、それぞれの母乳育児に関する経験、抱えている問題、悩みなどを母親達が自由に話し合い、時には共有し、助け合い、学び合うための活動を行うグループである。最初は助産師の働きかけで会を発足するが、最終的にはグループメンバーによる自主的運営をねらいとする。

B．対象者

ICMHのLMCに通っている母親で、母乳育児の話し合いをすることの働きかけに同意して参加した、乳児を持つ母親3名（A氏、B氏、C氏）と助産師1名（F助産師）を対象とした。

C．施設と事業の解説

1. Institute of Child and Mother Health：ICMH

ICMHはダッカ市内から4km離れた郊外に位置する国立の施設で、母子の健康維持向上を目指した活動を行っている。バングラデシュ政府及び世界銀行の資金援助で1999年3月20に開設した。医療関係者へのトレーニング、診療サービス、（入院患者約80名、外来患者約500名）、研究が主に行わている。

2．Akaeda Oketani Lactation Management Center：LMC

日本の赤枝医学研究財団の援助を得て、1999年8月1日にICMHの中に開設した。このセンターの目的は母乳育児を支援し、授乳に関する問題への援助を提供することである。乳房チェック、授乳指導、桶谷式手技、離乳食の栄養指導などを行っている。小児科医と産科医の管理下で、2人の助産師が働いている。月300名以上の母親が来所し、授乳指導や手技を受けている。

D．調査期間と活動方法

1．予備調査

a．予備調査は2001年3月～7月に行った。2001年3月11日から25日迄の14日間バングラデシュのICMHを訪れ、母乳育児の援助の実態を調査した。

その結果、バングラデシュの母乳推進方法は医療従事者の母乳に関する知識及びカウンセリング技法の学習、また「赤ちゃんに優しい病院」を増やすことに重きを置いている。その方法は医療者の育成が中心であり、母親はあくまでも受け身であることが理解できた。

b．6～7月にかけてF助産師と連絡を取り、母乳育児SHGを開催する準備を行った。

2．本調査

7月26日にバングラデシュを訪れ、本調査を2001年7月下旬～9月中旬に行った。現地のF助産師の協力を得て母乳育児SHG（当初6名）を開催し、日頃の母乳育児について感じていることを自由に話し合ってもらった。筆者は参加観察者として同席し、母親の様子や場の雰囲気などを観察し、参加者の許可を得て、会話をテープレコーダーに収録した。後にF助産師にベンガル語から英語に翻訳してもらい、観察メモを参考に内容を記録した。母乳育児SHGが開催された翌日、協力の得られた3名の母親（A氏、B氏、C氏）に、ICMHでF助産師にベンガル語と英語の通訳をしてもらってインタビューを行い、許可を得てテープレコーダーに収録した。1か月半後の9月に、母親の変化を知るために再度バングラデッシュを訪れ、3名の母親にインタビューを行い、母乳育児SHGに参画した現地のF助産師にもインタビューを行った。

E．分析

観察記録に記載された母乳育児SHGの場面、活動状況及びインタビューの情報から、母親の意識や行動の変化を分析した。解釈の妥当性を確かめるために、定期的に指導者のスーパービジョンを受けた。

F．倫理的配慮

参加メンバーに対しては、筆者の立場と目的

を明確に提示し承諾を得た。その際参加メンバーには研究に参加しない権利があり、インタビューの途中であっても協力を拒否できることを伝えた。

Ⅲ．結果

A．参加メンバーの紹介

母乳育児SHGの参加メンバーは、表1に示した6名であった。

B．母乳育児SHGの開催

1．第1回母乳育児SHGの状況

2001年7月26日LMCの手技室でSHGを開催した。F助産師は事前に6名の母親に働きかけて参加を促していてくれた。しかし事前の働きかけの参加者はA氏だけで、その後5名（B氏、C氏、D氏、E氏、F氏）が参加し、6名で開催された。

時間が過ぎても母親が集まらない為、最初2名（D氏、E氏）の参加者で始めた。F助産師と筆者が同席しているためか、2人の会話には緊張感がみられ、D氏が矢継ぎ早に質問し、E氏が答えるという形で進められた。D氏は質問することに一生懸命で相手の答えに対しての反応が乏しく、2人の会話に継続性がみられなかった。

その後途中でF助産師が部屋からでていった。2名の参加者は緊張がとれたのか、表情や口調がリラックスし始めた。健康教育の人気番組の話題となった時に、更に表情が豊かになり、お互いに打ち解けてきた様子がみられた。20分後に残りの4名（A氏、B氏、C氏、F氏）も参加し、D氏が中心になって積極的に話し合いが続いた。話の内容は離乳食の進め方、母乳育児の体験談、何故ミルクを足したか、母親が病気時の母乳について、母乳育児を支援してくれる人、専門医についてなど多彩であった。3名（A氏、D氏、E氏）が完全母乳であり、3名（B氏、C氏、F氏）は混合栄養であった。完全母乳の母親達は混合栄養の母親達に自分達の体験談を語り、どのように母乳を与えるかなどの助言が行われた。

ようやくグループとして母乳育児を骨子にした話し合いが軌道にのった頃に約1時間の話し合いが終了した。当日はインタビューを行う時間

表1．参加メンバーの概要（☆印は本報告の対象者）

氏名	年齢	学歴	児の年齢 性別 現在の体重	妊娠 出産について	ICMHを訪れた動機	家族について	SHG開始前 授乳状況
☆A氏	18歳	中学3年	5か月半 女児 5320g	第一子 ICUで分娩	SHG参加のため	父、母、弟、妹、 本人、長女の 9人	母乳栄養
☆B氏	20歳	小学4年	2か月半 男児 5320g	第一子 自宅分娩	湿疹のため 小児科受診	夫、本人、長男の 3人	混合栄養
☆C氏	26歳	教育は 受けていない	16か月半 女児 4500g	第三子 自宅分娩	児の予防接種	夫、本人、 長男、次男、長女の 5人	混合栄養
D氏	18歳位	—	約6か月 男児 —	第一子 ICUで分娩	児が風邪をひいた 小児科受診	—	母乳栄養
E氏	20歳位	—	約6か月 男児 —	第一子 流産1 自宅分娩	児の予防接種	—	母乳栄養
F氏	20歳位	—	— — —	第一子 自宅分娩	児が母乳を 飲まなくなった	—	混合栄養

を持てず、翌日に来所を依頼して、全員の了承を得られ、それぞれ帰宅の途についた。

翌日7月27日に来所した2名（A氏、B氏）にインタビューを行い、翌々日7月28日にはC氏が来所し、インタビューを行った。他の3名（D氏、E氏、F氏）は来所がなかったため、インタビューを行うことができなかった。

2．第2回母乳育児SHGの開催

2001年9月1日にLMCの手技室において、F助産師が働きかけて開催したが、筆者は参加できなかった。参加メンバーはA氏、B氏、C氏の他、そして本人の強い希望により、新しくG氏という母親がメンバーとして参加した。F助産師によると話し合われた内容は、どのように赤ちゃんをケアするのか、前回のSHG開催後約1か月半の間、他の母親をどのように支援したか等についてであったという。

C．母乳育児SHGが参加メンバーにもたらした変化

1．A氏について

15歳で結婚し現在は18歳である。背は低いがふくよかで、比較的がっしりした体格で、ベンガル人特有の浅黒い肌である。低くて太い声には威圧感がみられる。実年齢よりしっかりしていて、その表情から利発さや意思の強さが伺える。学歴は中学校3年程度を修了しており、その後も進学して勉強を続けたかったが、経済的理由で断念した。夫は現在22歳である。エンジニアの勉強を終え、1年前から工場職員としてクエートに出稼ぎ中である。夫は子どもの成長を楽しみにしていて、ほぼ毎日のように手紙や電話をよこす。A氏は現在実家の親妹弟と彼女の長女（生後5か月半）の9人で暮らしている。実母はA氏のよき相談者であり援助者で、ICMHを訪れる時にはいつも付き添い、常にA氏の意思を尊重している。宗教はイスラム教である。

a．母乳育児SHGの参加以前の状況

児への吸わせ方や乳房の状態をチェックしてもらうためにLMCに定期的に通っていた。現在A氏自身母乳に関しての問題はない。姑から「そんなに頻回（10～12回/日）に母乳を与える必要はない。もう他の食べ物を与えることができるのだから。それよりももっと働かなければならない。私の子どもはたくさんいたけど、あなたのようにはしなかった。」といわれた時に何も言い返さず、黙って授乳を続け、思いを抑圧していた。しかし縫い物の仕事を頼みにやってくる客や近所の人には「自分は仕事よりも赤ちゃんを優先させる」と、強く反発していた。

b．母乳育児SHGに参加した後の感想

A氏は自分の育児について周囲の人達からは中々認めてもらえないでいた。しかしSHGの中でA氏が児のために当然なこととして行ってきた母乳育児という行為に注目し、興味をもち、共感してくれる人達の存在をみつけることができた。親戚や近所の人達にもグループのメンバーとなったことを表明したことからも、A氏が社会の中で活躍できる場所をみつけたことが理解できた。SHGによってA氏は色々なことを学び、母親としてのモデルとなり、他の母親に教えてゆく責任を感じている。

《他の母親の違った考えに気づきました。私はその母親の間違いを正しました。そのことを通して大きな力を得ました。今私はモデルなのです。SHGから色々なことを学んで、私は地域の、そして私の村の、ICMHのモデルとなってゆくのです。ですから、とても大きな責任を持っていると思います。私の親戚や近所の人達は私がグループに参加したことをとても喜んで励ましてくれました。》

c．1か月半後の地域での活動状況

A氏は地域の中で乳児を持った母親のために日々忙しく活躍しており、近所の人も夫もA氏の行動「他の母親達を助けること」に関して協力的であり、好意的である。そしてA氏は周囲の母親達から信じられ、喜ばれる存在となっていると自ら語っている。近所の人達は外出回数の増えたA氏の行き先に何の疑問ももたなくなっている。

《最初の頃は周囲の人達から「どこへ行くのか？」と、よく聞かれました。今ではたくさんの人達が、私がSHGのメンバーだということを知っています。

私がSHGに参加して、そしてその後実際赤ちゃんをどのように抱えるかを見せたり、母乳の

情報を与えたりして、今では母親達は私を信じてくれています。ある日夫から電話がかかってきて「どこに行っていたのだ。ずっと君のことさがせなかったよ。以前はそんなことなかったのに。」と言いました。「私はSHGのメンバーだから、時々助けの必要な母親を連れてICMHに行かなければならないのよ。だから私はセルフヘルプマザーなのよ。私は母親達を助けるのよ。」そう言ったら、夫は「それじゃ行っていいよ。一日中でもそこに居ていいから」（笑う）といいました。》

d．活動を通しての変化

A氏は、日常の働きを通して地域住民に信じられ、村の誇りの人になっている。この国では聞きなれないSHGのメンバーとなり、母親達を助ける上での様々な経験を積んできたことによって、A氏には自信が生まれている。

《多分たくさんの人達が私を誇りに思ってくれていると思います。ある人が私に尋ねました。「あなたはたったクラス10（中学校3年程度）をパスしただけなのに、どのようにSHGのメンバーになったのですか？」と、私は「運でした。」と答えました。親戚や家族や近所の人も赤ちゃんのことをかわいがってくれます。何故なら私が教えたり、他の母親と色々なことについて分かち合っているからです。人々は私を信じてくれています。》

2．B氏について

B氏は10歳で結婚し、夫との生活を始めたのは11歳であった。現在20歳である。肌がやや浅黒い細面で、切れ長の目を持ち鼻筋が通っている。穏やかな話し方であり、その落ち着いた様子は実年齢よりも年上にみえる。学歴は小学校4年程度を修了しており、さらにもっと勉強を続けたかったが、自分より優秀になられては困るという夫の反対により勉強の継続はできなかった。夫は20歳に結婚し、現在30歳で野菜のビジネスをしている。家族は夫、本人、長男（生後2か月半）の3人である。夫はB氏にとって色々なことを相談できる唯一の存在である。宗教はイスラム教である。

a．母乳育児SHG参加以前の状況

熱が出て抗生物質を内服したあとから母乳不足になり、1週間ほどミルクとの混合栄養になっていた。母乳に関しては何の知識もなく、乳児の健康状態も良くなく、便がゆるく下痢気味であった。乳児の栄養や育児について近所の母親達に尋ねることができず、話し合える人もいなかった。B氏が若いため、何かをいうと、「いいえ、あなたは何も知らない。」といわれ続けていた。母乳に関する正しい情報を誰からも与えられず、周囲に支援してくれる女性達の存在も全くない状態であった。

b．母乳育児SHGに参加した後の感想

前日のSHGにおいては表情が硬く、緊張しきっていたB氏であったが、翌日のインタビューでは、笑顔と自信に満ち溢れた表情で、ミルクを一切止めて母乳だけにしたと喜びを語った。そのことは彼女の意識と行動に変化を現している。グループでの話し合いがきっかけとなり、「他の母親ともっと母乳について話したい」という意識と欲求が生まれてきた。

《どのように完全母乳を続けるのかを学ぶことができました。ミルクを止め、母乳だけにしました。とても嬉しいです。話しだしてから他の母親達と話すという「スピリット」を得ました。SHGに参加していない他の母親達にも話したいと思うようになりました。ここから帰った時、私は近所の人に言ったのです。「・・・私は母乳をどういうふうに続けたらよいかを知ったので、今日限りミルクを止めるわよ。赤ちゃんにとても良いことだから。あなたもミルクを与えるべきではないわ。・・・」ここでの体験をすべて夫と分かち合うことができるようになりました。SHGがすべてのことを分かち合える場所だと思っています。夫に昨日話した時、何のグループかわからないけど、とても良いことのようだから是非行くように励まされました。》

B氏はSHGに参加していない他の母親にも話したいと思うようになり、さっそく近所の母親に自分が学んだことや体験を語っている。そして他の母親へ母乳推進を始めだした。

c．1か月半後の地域での活動状況

B氏は他の母親達を母乳育児に導くことがSHGのメンバーとしての役割だと感じ、地域の中で母乳を推進し支援している。B氏にとって

LMCは、様々な症例との出会いがあり、母乳に関する知識を吸収する場所となっている。自らの問題解決だけではなく、他の母親に適切な指導をしてゆくための実践場所としてLMCに定期的に通っている。B氏の主たる関心は乳児を持つ他の母親であるが、母乳育児はより早い時期から母乳への支援が必要であることを認識し妊娠中の女性にも関心を寄せて行動している。

《LMCに定期的に来るようにしています。最近たくさんの母親を母乳に変えました。ある母親がライスパウダーを赤ちゃんに与えたり、あるいは他の食べ物に砂糖を混ぜていたら、私は母親に言っています。「あなたは母乳に変えるべきよ。赤ちゃんはまだ6か月にはなっていないのですから」。最初その母親は私を理解してくれませんでした。ですが私は彼女がLMCに来るのを助けました。彼女は今母乳のみです。・・・私は何人かの妊婦にすでに母乳の情報について話しました。「私達はSHGのメンバーで、私達はあなたを助けることができますよ」と色々な情報をすでに与えました。》

d．活動を通しての変化

B氏は母乳に関する知識を得て、自らも完全母乳となり、児はとても元気になった。夫も母乳育児を非常に喜んでいる。自らの体験を活かし他の母親達に母乳支援を行うことで、自信と「人々から尊敬されている」という誇りが生まれている。夫はB氏がSHGの活動を行うことについて「喜び」や「誇り」という言葉で積極的に表現しており、活動に理解を示し支援している。

《私達はここに来たら何か特別なパワーを感じるのです。日ごとに私達は大きな自信をもらうのです。他の母親達は私の言うことを聞いて、私を尊敬しています。夫は私のことをとても喜んでいます。私を誇りに思っています。

何故なら私達は「とても良い、素晴らしい仕事をしています。お金なしで。でもお金が重要ではありません、尊敬が重要です。」これが私の夫の意見です。・・・もし私がしょっちゅうここ（LMC）へ来て、2人の母親に教えることができると、その2人の母親が4人の母親に教えて、その4人の母親が10人に教えることができます。そのようにSHGを広げて行くことができます。》

B氏は自分達一人ひとりが他の母親に母乳推進を行うことにより、活動の輪が広がって行くと考えている。

3．C氏について

C氏は11歳で結婚し現在26歳である。ベンガル人の中ではかなり色白である。内面は芯の強さが感じられるが、静かであり積極的に行動するというタイプではない。落ち着いているため、実年齢より上にみえる。教育は受けていない。夫は24歳で結婚し、現在35歳で大工をしている。家族は夫、2人の息子、長女（生後1か月半）の5人家族である。宗教はイスラム教である。

a．母乳育児SHG参加前の状況

ミルクによる混合栄養であったが、児は風邪と下痢気味で健康ではなかった。乳房の状態も悪く、時折痛みがあった。ICMHの外来で児の診察を待っていた時、近くで哺乳瓶授乳をしていた母親が助産師にLMCを紹介されてつれて行かれるのを見た。そのことがきっかけで周囲の母親からLMCに関する情報を得たC氏は、自分の判断でLMCを来所した。

b．母乳育児SHGに参加した後の感想

前日のSHGではB氏と同様に緊張しきっていたC氏であったが、その後のインタビューではリラックスした表情と笑顔でSHGをきっかけに完全母乳へ移行したことを語った。そのことによりC氏の中に母乳育児に関する自信が生まれ始めていた。その体験は他の母親に躊躇なく母乳を勧められるという積極的な姿勢に彼女を変えつつある。また他の母親達の気持ちが分かり、身近に感じられるようになった。今までC氏は周囲に同じ母親として育児に関し話し合える人がいなかったが、その孤立感から脱しSHGが友人を得る機会となっている。

《母乳の良さについて知ることができました。SHGに参加後ミルクを止め、母乳のみにしました。色々話し合って行く中で、他の母親達の気持ちがわかるようになりました。他の母親達が身近に感じられるようになりました。・・これから私はたくさんの母親達と分かち合うことができます。そして友人ができます。母乳について教えてゆくことができますし、ためらいなく

母乳を勧めてゆくことができます。夫もSHGへの参加を賛成してくれていますので、続けて参加することができます。》

c．1か月半後の地域での状況

日常生活において周囲の妊婦、乳児をもつ母親へと目が向けられている。村には現在妊婦が1人いるだけだが、出産後にその女性を支援してゆく意欲がみられる。定期的にLMCに通い、その中でICMHの外来で乳児にミルクを与えていた1人の母親を説得し、LMCに連れて行った。その母親に自らの体験を語り、その後母親は完全母乳となった。

《LMCに定期的に通っています。他の母親達を助けたいと思っています。SHG後、村には出産した人がいないのです。1人だけ妊娠中の女性がいて、(児が）生まれるのを待っています。そして出産後私はこの母親を助けます。・・あるミルクを与えている母親を外来で見た時に、「だめよ、私達はここにLMCを持っているのよ。あなたもそこに行きましょうよ」そして私は彼女をLMCに連れてきたのです。》

1人の母親を母乳育児の成功に導くことができたことはC氏にとって大きな自信となった。

d．活動を通しての変化

C氏は完全母乳となり、意識と行動が変化した。その中で児が健康でとても良く成長しており、その事を夫が喜んでいる。C氏が行っている母乳育児と他の母親達を助けるという活動が夫にも影響を与え、夫は友人達に妻の母乳を助けるようにと勧めており、パートナーとしての夫の意識と行動にも変化が認められる。またC氏は、同じ体験を共有しているSHGの仲間や関わっている助産師が身近な存在となり、家族のような親近感を感じている。夫以外に気兼ねなく何でも話し合え、問題を共有でき、他の母親達のために働くという共通意識の仲間がいることは彼女の心の支えとなっている。

《今私は心がとても強くなっています。夫も言っているのですが、私達は1つの家族のメンバーみたいですねと。夫もとても喜んでいますし、赤ちゃんもとても良く成長しています。夫は友人達に彼らの妻の母乳育児を助けるようにと言っています。「私の妻はとても素晴らしい仕事をしています。F助産師やK助産師（筆者）に助けてもらって、赤ちゃんに母乳だけを与えています」と言っています。私の夫はいつも私を助けてくれます。》

4．F助産師へのインタビュー（2001年9月12日）

F助産師は第1回母乳育児SHG参加メンバーに対して「SHGは母乳を与える母親達の集まりで、それぞれの母乳育児に関する経験や抱えている問題、悩みなどを母親達が話し合い、時に共有して助け合い、学びあうための活動を行うグループです。今回は研究のために1つのモデルケースとして行い、参加メンバーの皆さんはモデルです。このSHGが成功したら他の地域にも広げてゆくことができます。」と説明している。SHGが始まった時「母親達は、恥ずかしがり、消極的（特にB氏とC氏は）だった。」しかしF助産師は「SHGを通して母親が心の底から自主的に話すことが出来ることに気づいた。」「メンバーがたくさんのことを学んだのはディスカッションを通してであり、母親達に自由にディスカッションを勧めることが大切だと気づいた。」と述べている。

Ⅳ．考察

A．完全母乳へと行動が変化した背景について

1．夫の理解と協力

最貧国であるバングラデシュでは娯楽や情報が少ない。現在首都ダッカ近隣にはテレビが普及し始めているが、まだ都会に住む一部の人達のものである。また文盲率は62％（女性74％）と高率であり、女性が自ら新聞雑誌などによる情報を得ることも難しい。バングラデシュの法律による結婚年齢は18歳であるが、村では12～13歳で結婚する女の子達が多い。今回インタビューを行った3名、も結婚年齢はA氏が15歳、B氏が10歳、C氏が11歳といずれも早婚であった。当然のことながら結婚年齢は学校教育にも影響を与えおり、A氏は中学校3年程度を修了、B氏は小学校4年程度を修了、C氏は教育を受けたことがない。多くの女性達は両親からの見合い結婚であり、結婚のために教育を中断している。

Kabeer（1996）は、「思春期に達した娘達を結婚させるという、集落村の宗教的な強制があり、13歳までか、遅くとも14歳までに結婚しなかったら、皆が家族について悪いことを触れまわる(p.27)」と述べている。このことはイスラム伝統社会では法律よりも村の「しきたり」あるいは「住民意識」が優先され、女性達が自由意志や選択権を主張することの難しさを物語っている。また結婚後は夫の許可がなければ市場への買い物にさえ外出することができないなど、イスラム伝統社会の女性達への規制は多く、その立場は脆弱である。このような伝統文化を持つ社会で、3人の参加者が完全母乳となり、他の母親にも働きかけができた背景には夫の存在があった。

何かあった時、親身に話を聞いてくれたり、相談にのってくれる存在は、参加者の3人とも「夫」と答えている。イスラム教の聖典であるコーランには、妻の夫への絶対服従がうたわれている。思春期の初めに結婚している女性にとって夫は頼れる存在であり、加えてイスラム伝統社会の女性達の規制は夫を頼らざるを得ない状況においている。しかし夫は女性の身体や母乳育児に関しての知識は当然ながらなく、それまで夫に全てを頼ってきたB氏やC氏など核家族の女性達は、どこからも知識を得ることができない状況にいた。今回SHGに参加した3名は良い夫婦関係であると感じていたが、それは参加者の夫がそれぞれにSHGへの参加をいち早く賛成し、完全母乳を喜び励ました行動から理解できる。そしてSHGへ参加者が継続参加できた背景には、最初に夫達の理解があった。SHGへの継続参加を希望していたにもかかわらず、その後継続できなかった他の3名のメンバーについては今回追跡調査を行うことはできなかった。しかしF助産師や参加メンバーによると、「バングラデシュではたとえ妻が望んでいても夫の反対があった場合、妻はそれに従うしかない。妻は夫の許可なしには自由に外出もできない。」という状況を説明してくれた。このことからも、バングラデシュにおいて母乳育児セルフヘルプグループを行う際には夫の理解が必要であると考える。

2．母乳育児を支援する女性の存在

A氏は同居している実母が支援し、助言したため早期から完全母乳になれた。このように母乳育児を成功させるためには母乳育児の成功経験をもつ女性が近くにいて、支援することが必要であると考える。

Raphael＆Davis（1985）は、「古い伝統社会だろうが、アメリカの郊外だろうが、母乳哺育に成功するためには周囲の手助けが必要であり、支援のネットワークがあるかないかでその母乳哺育が成功するかしないか予言できる(p.159)。」と述べているように、参加者はSHGを通して同じ悩みを持ち、過去に同じ体験をしてきた仲間の存在を知ることができた。その助言と励ましによって行動を変え、そして参加者はSHG終了後から翌日までにミルクを止め、完全母乳を行っていた。

Alan Garthner ＆Frank Riessman（1977）は、SHGの最も重要で唯一の共通点は、すでに経験してきた人の役割が他人を援助するためには重要であることを指摘している。それは、その経験がどんなものであるかを知っているだけでなく、自分が新しく要求される役割をどのように演じるかを知っているからである。参加メンバーがSHGで自分達が体験したことを、間をおかずに周囲に伝え、母乳推進の支援を他の母親達に始めたことからも理解できる。そして情報社会に侵されていないがゆえに、素朴な母親達のSHGでの話し合いが、母親達の経験を通しての多くの知識や情報を提供し、行動を変える場となっていったように考えられる。

B．母乳育児SHGの体験と行動

WHO（1981）の決議の中では哺育にも適切な方法とそうでない方法があるので、貧しくて知識のない母親が哺育について決める時には気をつけなければならないことを示唆している。バングラデシュで行われている母乳推進の方略も、専門家から母親への教育指導やカウンセリングが主であった。教育を受けていない女性が人工栄養の場合、準備する手順は大変困難である。第三世界では貧しい母親達が経済的理由や知識不足のためにミルクを薄めたり、十分に煮

沸していないお湯を使い、児が栄養失調や下痢を起こすことを耳にすることがある。

今回2人の参加者であるB氏とC氏は、SHGを通して一切ミルクを止め完全母乳となった。以前から完全母乳であったA氏は自己の体験を振り返り、それまで日常生活の中で普通に行っていた母乳育児の知識と体験が、他の母親達に非常に役立つことを知った。そして3人の参加者は他の母親達に対して、これから行ってゆくべき自分達の役割に気づき行動を開始した。

B氏の教育歴は小学校4年生程度を修了し、A氏は中学校3年程度を修了している。2人とも能力があり勉強を続けたかったが、経済的な理由から進学を断念している。しかし母乳育児を実践し、他の母親達を支援してゆくという役割の中で参加者はより多くの知識を得、さらに向上してゆこうとの姿勢がみられた。学びたいという意識が再び顕在化したように思われた。

SHGは、参加者にとって誰からも押さえつけられない、自由に分かち合いができる場となった。従来持っていた鬱積した感情をグループの話し合いや他の母親を支援することで発散し、昇華できるようになったと考えられる。またB氏は他の母親達と話すことにより「スピリット」を得たと述べている。このことはB氏がSHGを通して他者に話すという「勇気」と「気力」を得ることができ、周囲に心を開き、自分を解放していくことができたのだと考える。

経済的にコストのかからない母乳育児により児が健康になることで夫が喜んでくれ、コーランに書かれている母乳を2歳まで与えることは天国に行けるというイスラムの伝統社会の中で認められている母乳育児を自ら実践し、その支援を他者に行うことは、周囲の人々からの尊敬の念と自らの誇りを受けることでもある。そして尊敬されることにより参加者はさらに定期的にLMCへ通い、助産師や他の母親から学ぶ努力を継続していると考えられる

C．F助産師の変化

F助産師は最初「母親達は何も知らないから教育する必要がある」と考えていた。しかし初めは恥ずかしがり、消極的だった母親達が、SHGを通して活発に自分達の意見を述べ、学んでゆく姿を目の前に「母親達もまた心の底から自由に話すことに気づいた」という。そして母親が母乳育児の自己体験を通して自主性を発揮し、他者を支援する話し合いの場面に接して、話し合いを通しての相互作用の有効性に気付き実践を始めた。LMCにおいて母親のグループでの話し合いを度々企画するようになったのである。そしてF助産師は「全てを指導するのではなく、彼女達が失敗したり困った時だけ導くようになった」と語った。このことは母乳育児を援助するにあたって、助産師は母親にどのように関わるべきかを示唆していると考える。母親のあるがままを認め、見守ること、支援が必要な時を見逃さず援助してゆくこと、そして母親の中にある可能性を信じることが大切だと考える。

D．母親たちによる母乳育児SHGの自主的運営について

SHGの原型は産業革命の時期の友愛組合といわれている。その後、1960年代に入り米国ではセルフヘルプ運動とベトナム戦争への反戦運動、人権意識の高揚に伴う住民運動、女性解放運動が発展している。その後国連が障害者年や国際婦人年を打ち出し、地球規模での「人間らしい生き方」を求める運動が起こり、この流れの中でさらに多くのSHGが発展した（平野, 1995, p.7）。SHGは様々な社会的要因の中、時代の要請に伴って発生してきた。バングラデシュの母親達の社会的背景として、イスラム教の伝統社会であり女性の立場が脆弱である、早婚でありそのために学校教育も十分に受けられないという2つの点があげられる。バングラデシュでは過去に母親達による育児サポートグループの存在はなかった。医療関係者からも「母親達の多くは教育も受けていないし、何も知らない」という言葉を耳にすることがあり、バングラデシュでは現在、医師や助産師から母親へのカウンセリングによる母乳推進が主流となっている。女性への教育の必要性が軽視されている社会では、その能力の有無にかかわらずA氏やB氏のように経済的理由によって教育の継続がなされない場合が多い。女性達の向学心は水面下に押しやら

れ、夫に従い、子を産み育てる者としての役割が期待されている。今回の研究では教育の程度にかかわらず、グループの活動が母乳育児に有効であることが明らかになった。今後、母親によるSHGの自主的運営が行われるためには、そのための体制作りが必要だと考える。積極的に母親達が自由に語り合える場所や機会を設けてゆくこと、そしてある一定人数の母親のエンパワーメントがなされることが必要である。今回の参加メンバーのような人材が核となり、彼女達の手で自主的運営がなされてゆくことが望まれる。その時までしばらくの間、助産師の支援が必要だといえるだろう。

V．今後の課題

本研究は対象者が3名と少ないこと、またバングラデシュという距離的な問題もあり、参加メンバーを継続的に追うことができなかった。そして英語を全く話さない、ベンガル語を日常会話とする母親を対象としたことから、現地のF助産師にベンガル語から英語の通訳を依頼して行った。そのためインタビューにF助産師の主観が入った可能性も考えられる。また2回のSHGに参画して母親の行動や変化を観察する計画が、諸般の事情から一回のみの参加となり、後の一回はF助産師に依頼して行われた。バングラデシュにおける従来の母乳推進の方法は母親への教育や指導、カウンセリングが中心であった。しかしSHGを通して医療関係者はメンバーや他の母親を暖かく見守り、助けを求めるときに支援することで、母親自身が力を発揮することが理解できた。今後はICMHだけではなく、広く地域にセルフヘルプグループを立ち上げ、対象の数を増やし、個々の母親の母乳育児への取り組みや地域内での活動の幅を広げてゆくことが課題であると考える。

謝辞

研究にご協力いただきましたSHGのメンバー、並びに快く研究の場を提供して下さいましたICMHの所長はじめスタッフの皆様、フルクマリ助産師、赤枝財団の皆様、そして平澤美恵子教授のご指導に深く感謝いたします。

本研究は、2001年日本赤十字看護大学卒業研究の一部である。

文献

Dana Raphael, Flora Davis (1985)／小林登訳 (1991). 母親の英知―母乳哺育の医療人類学―, 医学書院, 133-168.

Haider, H (2002). Training Peer Counselors to Promote and Support Exclusive Breastfeeding in Bangladesh. Journal of Human Lactation, 18(1)7-12.

平野かよ子 (1995). セルフ・ヘルプグループによる回復, 川島書店, 6-7.

井筒俊彦訳(1957). コーラン(上), 岩波文庫, 43-57.

Kabeer, R. (1996)／大岩豊訳 (2000). 7人の女の物語―バングラデシュの農村から―, 連合出版, 24-87.

国際看護学研修編 (1999). 国際看護学入門, 医学書院, 53.

MQ-K Talkder.N, Begum. (1999). Introduction to ICMH(Institute of Child and Mother Health). Mindful Group, 19-37.

Newton, A. Plunkett, R.(1985). Bangladesh. Lonely Planet Publications Pty Ltd, 22-34.

高松里 (1986). 日本のSelf-Help Groupに関する文献と研究の状況, 人間性心理学研究(4), 84-96.

ユニセフ (国際児童基金)(2001)／ユニセフ駐日事務所訳, 2001世界子供白書, 財団法人日本ユニセフ協会(ユニセフ日本委員会), 70-96.